

コラム1 いたち川沿いの延命地蔵尊や水神碑

富山市の市街地を流れる「いたち川」、その川沿いに、数多くの地蔵尊や観音像、水神碑が並んでいる。いたち川は、常願寺川の馬瀬口が水源である。日本有数の暴れ川である常願寺川の水害の多くは、馬瀬口で堤防が切れて発生してきた。これは地形的な特色が影響している。常願寺川は、馬瀬口で大きく曲線を描き富山平野を流れ下っている。豪雨などで多量の水が速く流れる場合、曲がり切れずにそのまま直線状に堤防を破壊することが多く、この地から富山平野に流れ出た洪水が多い。

このように、馬瀬口を水源とするいたち川流域は水害の発生が多く、水害のたびに多数の人々が亡くなったのでその供養のため人々は地蔵尊を、そして、水害が起こらぬようと水神碑を祀ってきた。

特に、1858（安政5）年の飛越地震では、土砂崩れにより常願寺川が堰き止められ、土砂崩れダムが形成された。やがて、2週間後と2か月後の二度にわたり、崩壊土砂が堰き止めたダムが決壊、土石流が発生し、生活の場が土砂で埋まり、多くの死者や病人が出た。

この折、夢柄に現れた地蔵尊のお告げに従い、川から拾いあげた地蔵尊を供養したら病に苦しむ人々が快方に向かったと伝えられていたのが「石倉町の延命地蔵尊」（富山市石倉町）であるという。

このように、いたち川沿いに延命地蔵尊が数多く安置され、今日でも夏には地蔵まつりなどが行われてきたのは、飛越地震の土石流で亡くなった人々の供養のためであるが、地震による土砂災害を忘れないように伝承しようとしてきたあらわれである。

すべての地蔵尊が、安政5年の土石流で亡くなった人々の供養のために安置されたものではなく、また、いたち川から離れた所の地蔵尊が川沿いに移されたものもあるが、安政の災害を忘れないようにとの生活の知恵ともいえよう。

石倉町の延命地蔵尊をはじめ、地蔵尊や水神尊の多い地域は、常願寺川扇状地の扇端部でもあり、泉、大泉などの地名も示すように湧水地となっている。石倉町の延命地蔵尊の湧水は、いつしか「万病に効く水」として知られるようになり、今も多くの人々が水を汲みに訪れている。

なお、いたち川周辺と清水は、「いたち川の水辺と清水」として、2008（平成20）年、平成の名水百選に選定された。



写真コラム1-1 いたち川沿いの石倉町の延命地蔵尊と湧水（菊川茂撮影）